

集会所を道にひらくデザイン —厚木市緑ヶ丘団地「オープンストリート」構想の起点づくり—

田村 裕希^{*1} 森田 芳朗^{*1} 高城 光^{*2}

Design to Open the Meeting Place to the Street
— Creating the starting point for the “Open Street” concept for Midorigaoka Danchi, Atsugi City —

TAMURA Yuki^{*1} MORITA Yoshiro^{*1} TAKASHIRO Hikari^{*2}

We report on the implementation of the “Open Street” concept, which creates a new living landscape in the open space of an apartment complex. A disused meeting place in apartment complex will be connected to a promenade to create a communication hub for the community. The issue is how the design process opens up the place.

0. 背景

東京工芸大学と神奈川県住宅供給公社（以下、公社）は2018年1月より厚木市緑ヶ丘団地及び周辺地域の活性化に関する連携プロジェクト「ミドラボ」^{注1}に取り組んできた。2022年より団地の外部空間の整備に着手しており、小さな仕掛けを連鎖させ、フェンスや垣根を取り払い、団地のオープンスペースを「新しい道」でつなぐその実践手法を「オープンストリート」構想としてまとめた^り（図1）。



図1. 緑ヶ丘団地 オープンストリート構想のイメージ

2023年3月、団地集会所の隣の広場に、小さな仕掛けの第1弾として「コミュニティベンチ」^{注2}を設置して以降、集会所を「新しい道」の要素のひとつに位置付け、オープンストリート構想の起点とするデザイン案の検討と地域住民への周知に取り組んできた^{注3}（表1）。

1. 集会所を取り巻く状況の変化

設計対象である集会所は、団地の住棟が整備された1963年から22年が経過した1985年に、団地住民の交流を目的として公社及び(社)神奈川県住宅保全協会^{注4}によって、軽量鉄骨造平屋建て（床面積143.260㎡）の建物として建設された（図2）。

表1. 集会所改修設計スケジュール

周辺の整備
<ul style="list-style-type: none"> ・2022年11月05日（土）：実証実験「オープンストリート」 ・2023年03月16日～03月22日 コミュニティベンチの施工
集会所のデザイン検討
<ul style="list-style-type: none"> ・2023年04月～2023年07月：基本計画 ・2023年07月～2023年12月：補助事業^{注5}への申請 ・2024年02月23日（金・祝）：ミロード「ミロにわ」展の実施 ・2024年03月：実施設計スタート ・2024年03月13日（水）：集会室床下・壁・和室床下の一部解体 ・2024年04月22日（月）：ブレース位置の確認（LiDAR Scan） ・2024年05月26日（日）：横断歩道ペイントとアンケートの実施（2024年09月～2025年02月：工事期間予定）

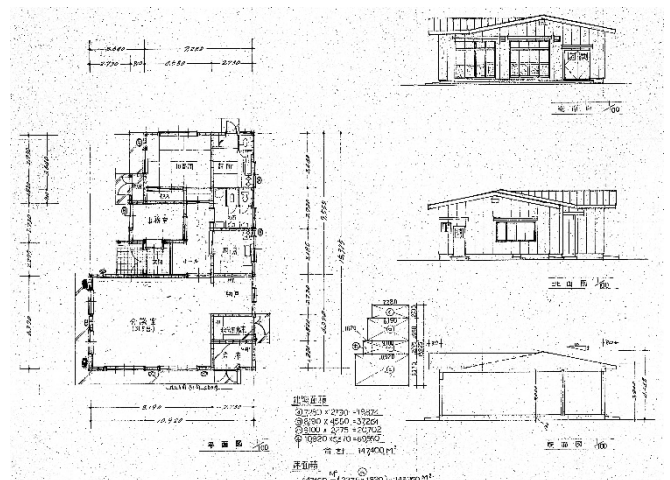


図2. 集会所の図面（1985年・(社)神奈川県住宅保全協会工事課）

現在、集会所は自治会を構成する一部の団地住民と公社によって管理されており、防災備品やイベント時に利用する物品の保管場所としての活用以外に、地域住民が気軽に利用できる状況にない。

2018年の調査²⁾によると、団地の集約と共に周辺に開

*1 東京工芸大学 工学部 工学科 教授 *2 東京工芸大学 芸術学部 デザイン学科 助教
2024年9月17日 受理

発された戸建て街区には子育て世代が流入する一方、団地の住民は高齢単身世帯が目立つなど住民属性は二極化している(図3)。地域に親しい人がいる割合は、戸建ての住民が65%であるのに対して、団地住民は40%に留まっている(図4)。集会所には団地住民がそれ以外の地域住民と交流する機能が求められ、想定される利用者もより広いものへと変化している。

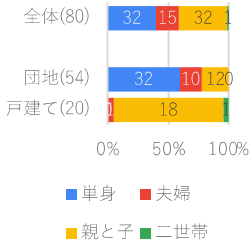


図3. 自治会の家族構成 (無回答を除く)

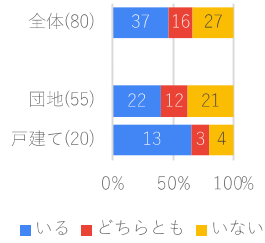


図4. 親しい人 (無回答を除く)

地域住民の属性の変化を踏まえて、地域へひらかれた場としての新しい集会所のあり方を検討し、デザインの検討と地域住民への周知及びヒアリング調査^{注6}を行ってきた。本論では集会所を道にひらくデザインを以下3つの「ひらく」に整理して、その検討内容を報告する。

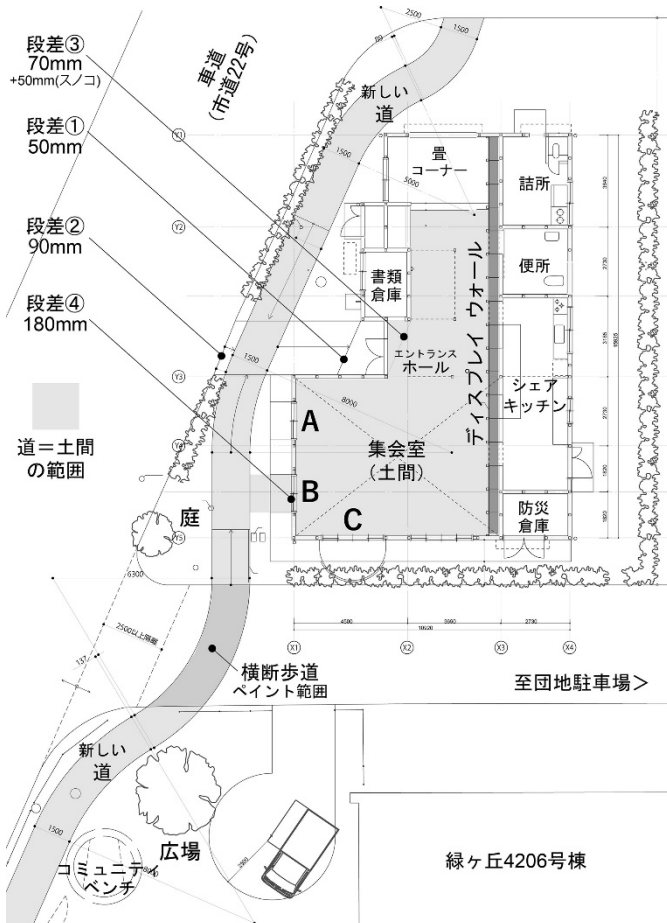


図5. 道を引き込む集会所のリノベーション案

2. 建物をひらく

2-1. 集会所を土間空間に変更する

現在の集会所は玄関で靴を脱ぐ上足利用となっている。高齢者にとっては靴を脱ぎ履きする動作が利用の際のひとつの障壁になっていることから、集会所を土間にし、下足で庭から直接アクセスできる、道を引き込むデザインとした(図5)。集会所には気軽に入ることができ、目的を持たない人も居られる場となる(図6)。



図6. 目的を持たず立ち寄れる集会所とディスプレイウォール

2-2. 段差の感じ方と空間の設え

一部解体調査^{注7}によって集会所の床がコンクリートでつくられていることがわかり、土間は既存床をそのまま利用することになった。段差に対して住民がどのように感じているのかを把握するため、ヒアリング調査を行った。調査した段差は、玄関ポーチの段差①(50mm)、道路と庭の段差②(90mm)、玄関かまちの段差③(70mm+スノコ50mm)、犬走りと集会所の段差④(180mm)である(図7)。



段差①: 玄関ポーチ
50mm



段差③: 玄関かまち
奥 70mm+手前 50mm



段差②: 道路と庭
90mm



段差④: 犬走りと集会所
180mm

図7. 調査した段差

最も段差が小さい玄関ポーチは大半が 50mm の段差を感じずほぼフラットと回答し、最も段差が大きい犬走りと集会室では大半がきつい段差であると評価した。閉鎖的な空間にある段差③は、開放的な空間にある段差②よりも実際には段差が小さい(スノコによって段差が緩和されている)にも関わらず「きつい」と評価する人が多く、段差の感じ方は空間の設えに影響されることがうかがえた(図 8)。

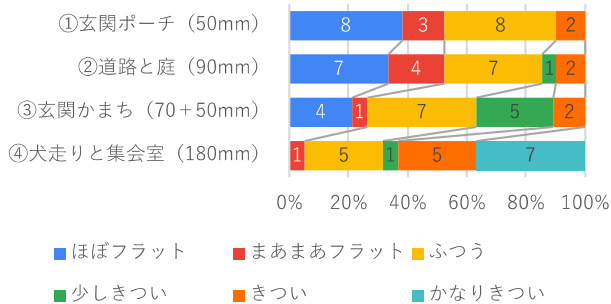


図 8. 段差に対する評価 (n=21, 無回答を除く)

2-3. 集会室の開放性と天井

集会室を開放的な空間にするため、天井を取り空間の開放性を優先するか、天井を残し天井裏空間が持つ断熱性を維持するかが議論の俎上にあがった。土間空間にする集会室を“建築の一室”と捉えるか、道と連続する“外部性の高い空間”として捉えるか、関係者の間で議論や認識を深めることのできる機会と考え、住民に対して天井の有無と空間に求める温熱環境についてヒアリングを行い、それぞれの関連性を確認した。その結果、天井を撤去したほうが良いと回答した人の多くが開放的な空間を求めているが、一方で開放的な空間を求める人の中にも天井を残した方が良いと回答した人がいるなど、空間の開放性と温熱環境への要求は必ずしも一致しなかった(図 9)。

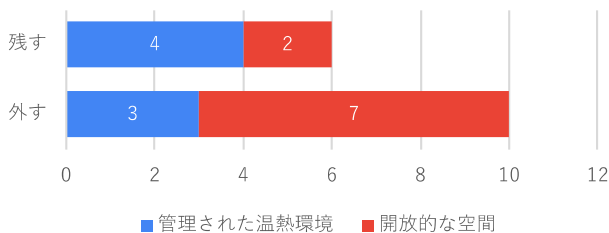


図 9. 集会室の開放性と天井の関係 (n=16, 無回答を除く)

2-4. 視線の向きと空間のつながりの関係

集会室には隣接する広場の方向に向く開口部が 3 つあり、広場とのつながりを作り出すため、どの開口から広場がよく見えるか(視覚的連続性)、広場に向かうためどの開口から道にアクセスするか(動線的連続性)、外部との出入りを考慮した際に段差を解消したいと考えている開口(空間的連続性)について 3 つの既存開口部 A,B,C (図

5) に対してヒアリングを行った。

視覚的連続性は C が最も高かったが、庭に面した B を選択する回答もあった。動線的連続性は視線方向にある C や B が高い結果となったが、一部 A という回答もあった。また空間的連続性は動線の連続性とほぼ一致した(図 10)。

ほとんどの人は視線の向いている方向に空間のつながりを感じていることがうかがえる一方で具体的なアクセスの方向は必ずしも視線の方向とは一致しておらず、庭や道を介したつながりがイメージされていることがわかる。

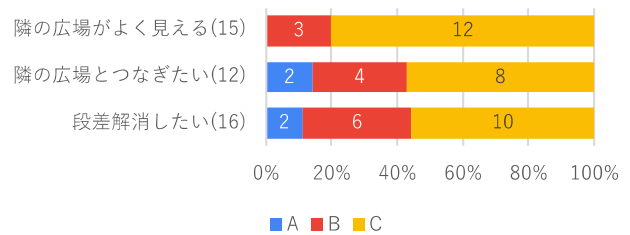


図 10. 集会室からの視認性 (n=16, 無回答を除く)

3. 場をひらく

3-1. ディスプレイウォール

集会室は、エントランスホールとの仕切り壁を一部解体し、事務室を書類倉庫に縮小して、南北を貫くワンルームとして畳コーナーまで拡張する(図 5)。

バックヤードと集会室を仕切る壁は、道にひらかれた集会所を象徴する全長 16m のディスプレイウォールとしてデザインする(図 11)。棚板の寸法は統一することで利用の幅が広がるようにした。棚の背板には奥のシェアキッチンにつながる開口があり、棚に置かれた物(モノ)と開口の奥に除くキッチンの様子(コト)が重なりながら集会室側に表出するデザインとした。



図 11. 集会室の内観。奥にディスプレイウォールが見える。

地域住民は、自宅に眠る思い入れのある品をディスプレイウォールに自由に展示して共有することができる。ディスプレイウォールに展示したいものを尋ねたところ、若い世代では「写真」「ミニチュア」「漫画」「楽器」など個人の趣味や経験を共有するものが多く、世代が上がると「子供たちの作品」「旅行の小物」など思い出や記憶にまつわる

ものもあがった。その他「災害時に役立つ備品」などモノ自体を共有する提案や、逆に一時的な利用としての「展示ケース」や「家に持ち帰るまでの一時展示」など棚を短期的に利用するイメージもあった(表2)。

表2. ディスプレイウォールに展示したいもの(年代順)

<ul style="list-style-type: none"> ・写真、魚の置物(5歳・男・団地分譲) ・写真(5歳・男・団地分譲) ・本、ミニチュア(8歳・男・団地賃貸) ・みんなが描いた絵(8歳・女・団地) ・災害時に役立つ備品(9歳・女・戸建て) ・本(10歳・女・団地) ・漫画、本(30代・男・戸建て) ・各々ケースに入れて、プラモ、楽器、おもちゃ(40代・男・団地分譲) ・絵本、集会所で作った作品、子供たちの作品(70代・女・団地賃貸) ・家に持ち帰るまでの一時的な展示(70代・女・団地賃貸) ・本(70代・女・団地賃貸) ・旅行の小物(80代・女・団地分譲)

3-2. シェアキッチン

シェアキッチンに対するヒアリングでは、入居してほしい店のイメージとして多かった回答はスナックフードで、購入後すぐに近くで腰をかけて食べる使われ方の想定が多かった(表3)

表3. シェアキッチンに入ってほしいお店(年代順)

<ul style="list-style-type: none"> ・パン屋、ケーキ屋(5歳・男・団地分譲) ・クレープ屋、ココアが飲みたい、アイス(5歳・男・団地分譲) ・ラッシー、ラム肉、うどん、寿司、お菓子屋さん(8歳・女・団地) ・ココア、ケーキ屋さん(8歳・女・団地) ・カフェ(8歳・男・団地賃貸) ・お菓子が食べられるようなカフェ(9歳・女・戸建て) ・ご飯屋さん(10歳・女・団地) ・フリフリポテト(10代・女・戸建て) ・焼きそば(10代・男・戸建て) ・カップケーキ屋さん(10代・女・戸建て) ・カフェ(20代・女・戸建て) ・ケバブ、じゃがバター、冷たい飲み物(30代・女・団地分譲) ・夏はかき氷(30代・男・戸建て) ・お好み焼き屋(50代・男・戸建て) ・キッチンカー(40代・男・団地分譲) ・農大とコラボ、農産物の直売所、八百屋(70代・女・団地賃貸) ・コーヒー(70代・女・団地賃貸) ・カフェ、お総菜屋(80代・女・団地分譲)

使い方としては「友人を招く」「勉強する」「本を読む」など自宅の延長としての利用が見られた。その他、トイレや乳児のミルクづくりなど、散歩や外出のついでに気軽に立ち寄る使い方や「食」に留まらない利用イメージの広がりがうかがえた(表4)。

場をひらくデザインの検討は、担い手がいれば具体的な要望がデザインを駆動させる。一方で本論では、利用の当事者がいなくなった集会所の再生であり、担い手を呼び込むデザインが求められた。最初にすべてを造り込む設えによる呼び込みではなく、試しに少しつくってみるスタートが住民の使い方や想像力を呼び起こし、地域に開かれた場が機会をひらき、試しにちょっと使ってみるスタートを呼び込み、このサイクルがデザインを駆動さ

せる。

表4. シェアキッチンで何をしたいか(年代順)

<ul style="list-style-type: none"> ・食事しながらテレビを見たりしてくつろぎたい(5歳・男・団地分譲) ・ご飯を食べる(5歳・男・団地分譲) ・本を読む、お勉強、縄跳び(8歳・男・団地賃貸) ・料理教室、ピアノ教室、テラスで食事がしたい(8歳・女・団地) ・テレビ、カラオケ、勉強会(8歳・女・団地) ・ハロウィンパーティ(9歳・女・戸建て) ・お祭りなどイベントの開催場所(10代・女・戸建て) ・お祭りなどイベントの開催場所、トイレ休憩の場所(10代・男・戸建て) ・友達と遊ぶときに使いたい(10歳・女・団地) ・機器があれば弁当を温めたりお湯(ミルク)を入れたりしたい(20代・女・戸建て) ・ Grill系など家で出来ない料理(機器があれば)(40代・男・団地分譲) ・みんなで集まるきっかけにしたい(70代・女・団地賃貸) ・サークルのような集まり(70代・女・団地賃貸) ・ネコや犬に来てほしい(1日限定とかで可)(70代・女・団地賃貸) ・喫茶店、ピアノの演奏、老人会(80代・女・団地分譲) ・トイレや休憩所として使いたい(80代・男・団地分譲)

4. 参加の輪をひらく

4-1. 横断歩道ペイント

集会所の前を抜ける新しい道は、団地住棟駐車場への引き込み道路を横切る。そこで道のデザインの延長として、歩行者の安全性を考慮した横断歩道ペイント^{注8}をデザインしている。視認性が高く、住民にとって親しみやすいパターン(図柄)の検討に地域住民の参加を促すため、パターン案の試し描きとヒアリング調査^{注6}を行った(図12)。



図12. 横断歩道ペイント試し描きの様子

横断歩道ペイントの視認性を確認するため、周辺の3か所からペイントに向かうルートを設定し、見え始めた位置を把握した。調査ルートは、①新しい道を北から南に向かい集会所の入り口前を通過して庭に至るルート、②車道を北から南に向かうルート、③車道を南から北に向かうルート、の3つとし、「見え始めた」と回答のあった位置を図

面にプロットした (図 13)。

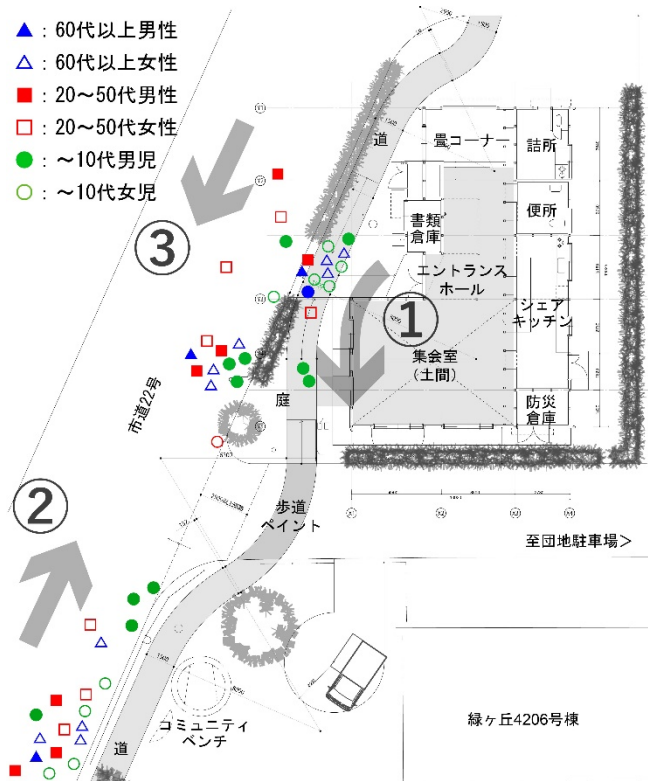


図 13. ペイントが見え始めた位置

その結果、①のルートは集会所の玄関前付近、②のルートは垣根が終わる位置、③のルートはコミュニティベンチ^{註2}付近にまとまっていることがわかった。また 10 歳以下の児童は視点が低いため、まとまりからは外れ、道の分岐点付近に集まっている。

ペイントのパターンに対する感想をヒアリングしたところ「楽しそう」「明るくていい」など視覚的な印象を好意的に捉える意見や、「集会所の庭とプレイロットがつながっているように見える」などレイアウトを「オープンストリート構想」や新しい道のコンセプトに照らして評価するコメントがあった。その他、「太い方が見やすい」や「見えづらいので色が欲しい」など具体的なパターンの提案や、「子供が参加しているのが良い」などイベント自体を評価するコメントもあった (表 5)。

横断歩道の試し描きイベントでは、地面に実際に描いてみることでデザインへの参加や評価へのハードルを下げ、地域住民が共に完成を見届ける時間を共有することで、利用のイメージを具体化できることがわかった。

4-2. 原寸図面を描き、体験する

2024 年 2 月、駅前のイベントスペースで、集会所の原寸図面を描くイベント^{註9}を行った (図 14)。

集会所リノベーション案の図面とイベントスペースの図面を重ね合わせ、土間にした集会所やディスプレイウォール、シェアキッチンが入るように配置した (図 15)。

表 5. 横断歩道ペイントの感想 (年代順)

- ・ボールに色を付けたい。周りにも色があると良い (5 歳・男・団地分譲)
- ・線と色が欲しい (虹色)。地面以外にも塗りたい (5 歳・男・団地分譲)
- ・お絵かきしたい (5 歳・男・団地分譲)
- ・線がもう少し欲しい (描きたい) (8 歳・女・団地)
- ・見えづらいので色が欲しい。線を太くしたい (8 歳・女・団地)
- ・カラフルだと思った (8 歳・男・団地賃貸)
- ・穏やかで楽しそうな印象。もう一本分くらい太い方が見やすい (9 歳・女・戸建て)
- ・繋がりは薄い (9 歳・女・戸建て)
- ・蛍光色を使う (10 代・男・戸建て)
- ・集会場の庭とプレイロットがつながっているように見える (10 歳・女・団地)
- ・子どもが参加しているのが良い (30 代・女・団地分譲)
- ・もっと明るくしてほしい (30 代・男・戸建て)
- ・黄色は NG。少し狭く感じる。白が強いと目立つと思った (30 代・女・団地)
- ・建物と合わせてカラフルが良い (40 代・男・団地分譲)
- ・明るくていいと思う (50 代・男・戸建て)
- ・お花が植わっていると良い。レンガを使うなど (60 代・女・戸建て)
- ・もう少し濃くしてもよさそう。太い分には太いだけいいのでは (70 代・女・団地賃貸)
- ・子供にもわかりやすくしたい (70 代・女・団地賃貸)
- ・上からでも道が認識できる。道のまわりに色があるといい (70 代・女・団地賃貸)
- ・色の付いたレンガや軽石を置くとか (70 代・女・団地賃貸)



図 14. 集会所の原寸図面を描く

図面の上では、地元の子供たちを招いたお絵描きイベント^{註10}を行い、地域住民に集会所の計画案を体験してもらった。こうしたイベントを通して集会所の運営の担い手探

しにも着手している。

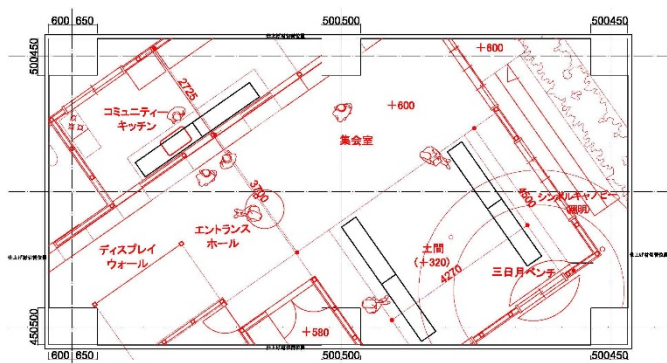


図 15. ミロにわのなかの集会所

5. まとめ 一場をひらくこと

団地の集約と共に住民属性が変化した地域において、団地集会所の新しいあり方を検討した。「建物をひらく」「場をひらく」「参加の輪をひらく」の3つのひらきから地域と道にひらかれた集会室のデザインを報告した。

2章「建物をひらく」ではアクセスや動作の障壁を取り払うことで気軽に立ち寄り、目的のない人が居られる場を計画した。3章「場をひらく」ではスモールスタート/スモールユースのサイクルが駆動する担い手を発掘するデザインについて論じ、4章「参加の輪をひらく」では地域の住民にもデザインへの参加の機会をひらいた。

担い手を呼び込むデザインを実践する過程では、議題に上がる実務的な問題のなかにデザインへの認識や理解を深める機会を見出すことができる。オープンストリートという概念や構想を前提として共有しているからこそ、デザインのプロセスを合意や決定のため機会として収束させるのではなく、地域の住民をデザインの当事者として招き入れ、参加の機会をひらく。

参考文献

- 1) 田村裕希、森田芳朗、八尾廣、茶屋道京佑 厚木市緑ヶ丘団地における「オープンストリート」構想の実践、日本建築学会 第18回住宅系研究報告会(2023) 農村計画委員会・都市計画委員会・建築計画委員会・建築社会システム委員会 pp.161-168
- 2) 森田芳朗、市原出、岩田祐佳梨、鍛佳代子、玄英麗、水谷国男、八尾廣、山本佳嗣 厚木市緑ヶ丘団地の活性化に向けた考察 ミドラボ 2018 の活動を踏まえて、日本建築学会 学術講演梗概集 建築社会システム (2019) pp.233-234

注釈

- 1) 東京工芸大学と神奈川県住宅供給公社は2018年1月より厚木市緑ヶ丘団地及び周辺地域の活性化に向けた連携・

協力に関する協定を締結し「ミドラボ」という教育・研究プロジェクトを立ち上げた。学生による建築・ランドスケープの設計提案やウェルネス住宅の実証実験、マンガや映像を用いたメディア制作などを通して地域の魅力を再発見し、新しい生活の風景の創出を目的に取り組んでいる。

- 2) コニカミノルタ科学技術振興財団研究奨励金(2022年度、代表：田村裕希)と科学研究費補助金「高経年集合住宅団地における「タクティカル・サバーバニズム」の実践と評価」(基盤C、2022年度～、代表：森田芳朗)の助成を受けて制作されたベンチ。将来、敷設されるであろう「新しい道」の休憩ベンチとして、東京工芸大学田村裕希研究室がデザインし、神奈川住宅供給公社と森田芳朗の監修のもと設置された。
- 3) 集会所をオープンストリート構想の起点とするデザイン案は「ミドラボ」における企画発案をもとに、東京工芸大学工学部工学科建築コース田村裕希研究室(大塚昂、舟窪麻友美、加藤千尋、佐藤宏星、柏崎有紀、永井拳心)がデザイン案としてまとめた。デザイン案はミドラボと(一社)かながわ土地建物保全協会の協力を得て基本設計図にまとめた。
- 4) 現(一社)かながわ土地建物保全協会
- 5) 国土交通省「人生100年時代を支える住まい環境整備モデル事業」
- 6) 2024年5月26日(日)に地域住民に計画案の説明とデザイン案に対するヒアリング調査を行った。回答者は21名で60代以上が6名、20代～50代が6名、10代以下が9名、男女比は2:3であった。6割が緑ヶ丘団地、それ以外は周辺の戸建て住宅エリアの居住者であった。本論で紹介するアンケート結果はこの時に得たものである。
- 7) 2024年3月13日(水)に集会所の所有者である神奈川県住宅供給公社と団地管理会社によって集会所の主要箇所に対する穴あけ調査を行った。この調査で、集会室の既存床がコンクリートであること、床の配筋量、集会室の壁内部にあるプレスの確認、和室の床下の布基礎と床組み等を確認した。
- 8) 実施場所は市道ではなく公社の敷地内であり、ここでは便宜上「横断歩道」と呼んでいるが道路交通法に基づく施設とは異なるものである。警察署との事前相談から得られた情報をもとに実際の横断歩道と誤解されないよう、市道との境界線から2mセットバックした位置で実際の横断歩道とは異なるデザイン案で検討している。
- 9) 2024年2月3日(土)～2月23日(金・祝)の期間、小田急本厚木ミロード4階スカイロードでミドラボ「パネル展」を行った。会期最終日には同4階のイベントスペース「ミロにわ」にて集会所の原寸図面を体験するイベントを行い、地域に広く計画案を紹介した。
- 10) 厚木市に拠点を置くデザイン事務所 Tiramisu の「青空おやつ」
参考：<https://tiramisu.com/aozoraoyatsu>
(2024年8月16日最終閲覧)